日本書紀傳 十五卷 三

三十七

和書
一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (46)
函號 特85 1

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫
宮内省圖書寮文庫
宮内省圖書寮文庫

えなる備鎮御魂齋戸祭詞ハ奉御衣波上下備奉色ゝ見
えなるも衣と袴との事あり古事記伊豆志神殿ハ汝有得
此孃子者避上下衣服云ゝと有て其下ハ即其母取布
遯葛而一宿之間織縫衣褌及襪沓亦作弓矢令服其衣
褌等云ゝと云て正しく衣と褌を上下と云れば右ハ
云る如く裳と云も下と云も同じくて其即褌なれば
上古ハ相通ハして裳と云りけむ事を知べきなり
備太神宮式伊弉諾宮月夜見宮等の如き男神の宮ハ
奉ゝせ給ふ御裝束ハ帛錦袴と云見えたり○八坂
瓊之五百箇御統ハ古事記ハ八尺句璁之五百津之

内一二六八三號

美須麻流之珠と有り此れハ第一の書（書第三書下章第二）に書れ五百箇御統之瓊と有て八坂を指うれ第二の一書にハ瑞八坂瓊之曲玉とも唯れ八坂之瓊曲玉と身も有り此とハ別なれど也宝鏡開始章れも（上技懸）八坂瓊之五百箇御統と見え其第三の一書れハ天明玉所作八坂瓊之曲玉と有り天孫降臨章第一の一書れ見えたる三種宝物の一なる八坂瓊曲玉是なり其第二の一書れ大己貴神の即剱披瑞之八坂瓊而長隱者矣と見え垂仁天皇八十七年御紀れ獻腹有八尺瓊句玉因以獻之と云ひ景行天皇十二年御紀れ投磯津山賢木云こ下枝挂八尺瓊と見え仲哀天

れ太古以八坂瓊（五十箇之御統）為宝所謂速須佐能神將上天之時奉即神名櫛明玉奉授彼後亦須佐能神奉天照姫之神即所載神宝是也乃名形部神載聚到常世之国之時於海辺国神則八坂瓊句玉振薬竹と有り北八岑の議左大辨従四位上兼行讃岐守源朝臣恒茂奉勅撰と有て古と書あるが貞書れ嘉元年三月二十日以前中書王以蔵本書之と有て金沢文庫の本なるが僅れ此巻のみ世の傳伝るハ甚美たき事なり

皇八年御紀れも右の如き事有て上枝御八尺瓊と有り右ハ何れも物ハ同しきを精しくも又粗くも云るれて其義れ於て異なる所有れ非ず古事記も石屋戸段れハ此と同ト く其名を細され記されなるを御天降段れ至てハ唯れ八尺句璁と身有り其片方れ委しきが故れ切め云るなる可し備紀記を合せて右れ引るれ八坂と八尺との中れ義を求るれ八坂ハ借字れして八尺なるも正字れハ有ける然して其尺ハ天御量以て度る一丈を十れ割て幾尺と云ふ尺なり備此を佐加と云ハ割の義なるが邂逅れ字音と訓を同ト く為るなり備此の八ハ弥の意れして瓊綸も轆轤れ貫連ねたる其長を以て

八尺瓊と云ふ物の尺の長きを八尺と云例
ハ先高橋氏文に得八尺白蛤一貝と見え常陸風土記
多珂郡條に海有鰒魚大如八尺と有るハ弥尺の義
ある事云も更なり神名帳に武蔵国賀美郡今城青八
坂稲実神社と有る青八坂ハ稲実の発語にして謂ゆ
る八束穂など云むが如く其穂の長の処なるを云な
り万葉十三十六丁に吾嗟八尺之嗟玉桙乃道来人之立
留何常問者と有るハ歎きの息の長きを八尺と云ゆ
道来る人の立留り何と怪しと問ふと有ゆて考ふ
可し又三十四丁朝霧乃思惑而杖不足八尺乃歎く支記孝

無見跡と有も右に同じく杖不足ハ百不足五十又ハ
百不足八十と云が如く一杖に不足る八尺と云事な
り十四二十九丁に也左可抒理伊伎豆久伊毛子と有ハ二
十四十九丁に尓保杼里乃於吉奈我河波半と続けたるが
如く鵜鶘ハ水より浮て出て長く息衝く物なる故に
八尺鳥とハ云なる可し此等を以ても八尺ハ弥尺な
る事を暁る可くなむ有ける又十四巻上野国歌に伊香保呂能夜佐可能為提ハ八尺の堰手と云事に
尓云こと有る夜佐可能為提ハ弥坂の意なるゆや和名抄郷
ハ非る可く若くハ此ハ弥坂也佐加と有ハ今京の東山に
名に山城国愛宕郡八坂也佐加と有ハ今京の東山に
当れる地なるを思ふに此八坂ハ弥坂なる可く所思
ひ入れる越後風土記に八坂丹玉名謂玉色青故云青八坂

○又出示神天皇御紀に八坂振天其意是と云人名の八坂ハ地名
に非ず此ハ天と云む発語にて久方之ハ遠方之と云が如く敬
経の意なれハ皆の例に非

丹玉也と云文を見るに八坂丹と云ハ唯玉名あるを其色青き故に青ハ坂丹玉と云とあり斯れば連珠を云ふハ非ず一の玉を云ふくゐて予が八尺の説ハ立ざるに似さりと雖も熟思あれ右ハ尺にも坂にも意有て云ふ〳〵ず唯其色に就て名くる所あれば更に予が説の妨とハ成さるあり且右に引る景行天皇十二年御紀に枝磯津山賢木以上枝挂八握劒中枝挂八咫鏡下枝挂八尺瓊と有て劒に八握と云ふハ其長を云ひ鏡に八咫と云ハ其度を云に准〳〵へて瓊に八尺と云も其緒に連たる大化の長さを以て云る所由をも明らむ可き者あり其上皇太神宮儀式帳にハ此の八坂瓊之曲玉の事を八尺鬘乃曲玉と書き一本にハ鬘を縵に作るを以ても玉を鬘の如く許多に要無れて御髻にも御鬘にも御頸にも御手にも懸る物ある故に八尺鬘とも云あり此を以て八坂瓊の形狀をも思合す可き者にあらむ有ける然るを私記に古事記云八尺今此云八坂蓋是尺與坂其説相渉故其字又異也然則此云八坂者蓋是地名也此地出美玉稼之以作御纓也故遠尋本地云八坂瓊也非謂八尺之句玉也と有ハ不審〳〵き事あり其ハ八坂を地名と云事あれども此ハ天上にての事あり何ぞ顯国に玉を求めさせ給ハむや其八坂の地名ハ山城にあるが何に在り唯口に任せて云紛〳〵たる者にて更に由無し又口訣に八坂者弥栄之言と云も玉に栄ゆると云義無れば此も如何あり古人の説に右の如

くり巡らせども未思得す猶能考ふ可し」と云置れうるを
出雲神賀詞後紀に賀茂翁の八尺句瓊を翠て輪に成せるを云り」と云れ
長き緒に多くの玉を貫て輪に成せるを云り」と云れ
たるをたゞめて八尺句瓊とハ多くの名を惣たる上の
名なるを云ハ非ず一玉の上の名あり垂仁天皇御紀に格の為
腰に八尺瓊曲玉の有し事見えたり緒に貫て輪に為
たる玉ハ獸の腰内に在べき由無し此ハ一玉を云事著明し云て八尺
云事ハ弥の意尺ハ佐明なり先玉に明と云事ハ云も更なり
れど羽明玉櫛明玉あり云ふ神名も玉に依れる事
神代紀を見て知べし佐ハ佐祢の略にて眞と云と同
ト云と云れたれども強言なり右の格腰に一玉
に連珠に在れ爭てが然る物の生る事の右
に在れも人の玉を呑迄居たるが殺されたるより出たるに
難可けれが此を以て八尺瓊を一玉と云に據に立
云ハ將欲き事に又八を弥眞明と説れたる玉に然も
ざ古記に可しを弥尺を有れども右に説る如く弥尺に
を何の文に相ハ
と云為む
○瓊ハ其例を秉むるに八洲起

元章天之瓊矛の下に瓊玉也此曰努と注されたるに私
記に今或本努字為貳也蓋古者謂玉或為努或為貳兩
說並通唯以貳為異本と有り下章第三一書に瓊響槍
槍此云奴儺等母と羅尓と有り天武天皇御紀に大蕤
娘舊事紀に天蕤槍あり有る共に努ある事傳六十五丁
に云るが如し又古事記の沼河日賣此御紀綏靖天皇
の大御名を神渟名川耳尊と申奉る如きハ万葉十三
九に沼名河之底奈流玉求而得之玉可毛拾而得之玉
可毛と有に依て瓊之河の義なるあり又此第一一書
ある天渟名井も其玉を濯がせ給ふに由る名ある可

けれバ其ハ天瓊之井の義なる可き事推准ふへて曉る可し然れハ瓊を努て云けるなめ然れハ神功皇后御紀ハ所見なる大津淳中倉之長峽と云ふ地名も瓊之倉と云ふ因れるなる可し大津ハ船の泊る處なるか故ハ貨財の倉庫を建列めるる由と聞ゆ敏達天皇の大御名を淳中倉太珠敷尊と申奉るなどを考合す可し又天武天皇を天淳中原瀛眞人天皇と然れども玉名と定め居称奉れる淳も必瓊なる事記の美須麻流迹などの如く貳と云べく其余ハ矛ハ瓊を て云時ハ此八坂瓊の如く貳と云べく

附け河ハ玉の有など伜事ハ係れるハハ轉して努と云て體用を分ち輕重を定むる格と通えたり斯れハ何方迄も瓊ハ貳と云なる玉其本語ハハ有ける偖其言ハ傳六六十ハ六丁ハ云る如く人の妍きを八洲起元章ハ憲

哉と見え其第一ノ一書ハ妍哉此云阿那而惠夜と註され第五ノ書ハハ美哉と作れなり神武天皇御紀ハ国狀の委麗しきを讃て妍哉と詔給へりしも何も貳と云義ハ於てハ少くも異り有べからず出雲風土記ハ此国非大非小云ニ是者尔多志枳小国在詔故云ニ尔多と云事の有も尔ハ妍なり多志ハ愷なり枳ハ其形狀を云るハて右ハ同ト又古事記明宮ハ麗美き孃子を得させ給ひける時の大御歌ハ伊知比葦能和迦佐能迦袁波都迦波波陀阿可良氣美志波迦迦具理能曾能那迦都迦袁加夫都久麻比迦波阿豆受

国立公文書館 National Archives of Japan

麻用賀岐許迩加岐多礼と有て土を迩と云も美しく
黛として畫が故あり又万葉に狭丹頬相と云発語の
有も丹に右の妍に同じきを活機うせて迩保布と云
に妍の延て表るゝ事あり万葉一十四に紫草能尓保
敝流妹子三五十一千に茵花香君之ゐと云類多く十六七
竹取翁歌に丹因子等何とも羅丹津敝経色丹名著来
とも丹穂之為衣丹あゐと有も迩も本にして云るあり
源氏物語あゐに迩保比と云事殊に多し桐壺巻に源
氏君の生給ふ事を世に清らなる玉の男御子さへ生
れ給ひぬ珍らかなる児の御形なりと云て下に此御
迩保比に並び給ふ可くも非りければ云こと有り
玉と迩保比とを相照して書取れる意味の妙なる事
を知へし又祝詞に赤丹穂と有を酒食を食て面貌の

麗美しく成れ
るを云るなり然れば右等の迩てふ言葉も何れも
玉を本として成れる語共なり可し中に尊き神等の
御威儀にも猶玉ふも勝れて美好く麗細しく御在
坐が故ふ海宮遊行章第七に書に所見たる豐玉姫
命の玉依姫命に寄せて皇御孫尊に奉らせ給へる御
歌ふ阿軍琴弾那芸毘比詞理利播阿利登比鄧播伊珮耐企
耶牧奈賜賜比志多輔妬句阿利計利と詠せたる御心を
想像奉る可し然れば瓊の威も妍の迩も共に同じく
其艶ひの美好しとも麗細しとも云知て妙に奇しく
貴き由の言ふる者なり礼記に瓊者赤玉也と云れ名

義抄に（多麻と訓て）赤玉と註されたるに字に依れる説あるべ（押）く並べて赤玉なりしなる可し　右の御歌（上三句）を古事記に阿加陀麻波袁佐閇比加（君が裝給へる）礼杼斯良多麻能と有に赤玉に（其）緒さへ光れども白珠に尊しと云義と見由

倩此八坂瓊に加何なる御状なりしも知奉る可からず非ずと雖も右百十に引る越後風土記に玉色青故云青八坂丹玉と言と云言を殊更に冠らせたるを思へば赤玉なるべき也も知べからず　其に出雲神賀詞に赤玉能御阿加良比比乍と有に他祝詞に赤丹坐牟と云に同し状なる語穂に聞食氏豊明に丹と云る事も有れば然も有む なるに常に赤きを白丹と云るを思ひ違へるなり　○五百箇に古事記に五百津と有り此に

（但此五百箇を和名抄に曷錦に八坂瓊五十箇之御統玉と有り五百と云も五十と云も共に数の多きを唯大抵に云りと知べし）

上章第六に書紀第七に書等に五百箇磐石と云事の有て其傳十八に云る如く五百に八百と同じく数の五にても八にても非ず共に弥百の義にて物の多きを然云るなり　箇に一に二の津なり　出雲風土記に五百津鉏神鉏万葉十九四十に天に波母五百都綱波布萬代に国所知年等五百都に奈波布なる其例なり　弥に十二十六に水良玉五百都集字解に不見吾者于可太奴相日待に有なる此五百箇御統の事に思寄せ打る者なり　古事記朝倉宮段大御歌に加那須岐母伊本知母賀母を詠せさせ給へる伊本知に五百津なるも思ひ出るも猶知に千の義にも有む　○御統此云美須磨屢に古

（△日本紀竟宴歌ハ天穂日神の御祖ハ八尺瓊の五百つ緒ハ皇御孫の玉とゝろ掛け）

事記ハ美須麻流と有り記傳七三十ハ纂疏ハ以絲貫穿總括之也と有る意ゝて即須夫流と諸通へり記中の高比賣命の歌ハ多麻能美須麻流美須麻流迩と有り玉之御統瓊なり万葉十二十六ハ水良玉五百都集二十八四ハ思良多麻能伊都二度比手ハ年須此ゝ多麻と云ふ賦るも同物なり集と云ふも即統の意なり（身ヌキ）と云れとる如く右の年須夫流の統の義ハ此ハ克合へり然れバ統ハ締と通ひ總（ふさ）の義と成て集も結ぶも同義ハ約ハれり記傳ハ又士清説ハ和名抄景宿類ハ昴星和名須ハ天門冬和名須ハ名久佐と云も葉の細ハ集れるが似られバ然れとも予が心ハ其草の根ハ丸くハ長き物なるが一莖の下より許多く成出て実ハ玉を貫聯ねた

る如くなれバ號と（も）ふり釋迦義ハ私記曰問御統何物成れるハ根ハ依るなり

誠答是聯綴美玉而為也其玉穿穴綴集所成也以之嬰緊可頸（其頸）以為美飾（也）故古事記云美須方流之珠也古歌云阿奈太万波世是則穴玉耳言其玉有穿穴連集也と見

元又下ハ先師説云統者總也言聯綴五百箇之玉以總經其頸之義也神代之風以玉為身飾延喜太神宮式御裝束内頸玉手玉足玉等有之蓋神世之因縁也と有り

但此ハ唯大御身の美飾のミハ有べらず未甲冑の製無ゝ之ゆし古の事なれハ此を以て武き御備の一ハ充給へるハ非ト云其ハ此餘の事共ハ皆其御

備あるゐ此一事耳をハ如何わしても御美餝とハ見奉るおとき文あり熟こと上下の文を考合すれ可くあるも有ける備右の如く穴を穿ちて緒なる其形狀曲れるが如くあるが故わ曲玉と云ふ其ハ帯二ノ書瑞ハ坂瓊之曲玉の下わ説べし傳十七十九丁見る可し予對馬国下縣郡住吉神社わ傳ハれる曲玉圖を藏めたるわ水戸人吉田令世と云人の著せる句璁圖譯と云物わ載たるも同圖あり此ハ青玉わて管玉二百十一有を珠數と云物の如く赤絲を以緒べ括りて其曲れる長三尺許有り八尺と云ひ御緒と云ひ曲玉と云ふ狀か

む古書の趣わ露も違ハさりける予が本い橘經亮の書れたるを丹後国久美濱稲葉英好と云人の持るを其男太訓わ寫させたるあり其項小泉康敬見て云けるく此ハ先年初て京わ来りし時神祇伯王殿甚く驚っせ給ひて内侍所の曲玉の失あどして人の手わ渡れるが其寫の世わ散ばゐわ非ずうて其うり齋隠り給ひて内侍所の御を改見奉るしうども失給いざりければ始て對馬のありとい曉くして御心落居させ給ひし事なりと語れり然思誤すと始て神代の御ハ斯る物わころを以て予も聰圖訳わい浪華兼葭堂藏と有り藤田一正と云人の句書古玉圖後と云文を載たり右對馬国住吾神祠神寶古玉圖一紙浪華兼葭堂所藏土佐人苅谷良藏東遊之次携以示我友高野子隠云云據圖玉皆青色貫以赤絲其狀頗美忘珠玉之如短管若累二子相連百数左右両門大小相称其長三尺又有横相通者凡三處其管玉比左右猪小皆統以句玉句玉凡八如鉤而有穴可以相連其上可以纓頭其中可以當脇其下可以當脇云云既而兼葭堂翁出一大句玉以相示其質粗其色玄曰是出琉球

云々巫女祀神掛其頸以為髆又聞毛人亦有此物謂之美須麻流其象與周漢佩玉迫似蓋亦類耳云々但如釣而有穴云々を曲玉と云ハ世の云所ハ後へる者ハて非なり其ハ第二ノ一書ハ就て委しく辨へてむべし

○髻鬘を新撰字鏡ハ訓ハ師説弘仁私記有両説一説髻鬘連読伊奈太支一説髻美川良然則両説可兼用也と有て其ハ訓二なり万葉三四十ハ伊奈太吉尓伎須賣流玉者四丁無二此方彼方毛君之隨意と有ハ頂ハ結へる髻ハ角の如くして二有り着べき玉ハ一のみなり右ハ着くも左ハ着くも君が任意と云義なるハも叶ひ又二十九丁ハ阿母刀自母多麻尓母賀母夜伊多太伎豆美都良乃奈可尓阿敝麻可麻久母と有ハ母刀自も玉ハ

△新撰字鏡ハ髻を伊奈太伎と訓り

も欲得や頂きて髻（ミヅラ）の中ハ合へ纏むと云事ハて此二歌ハ叶ふと雖も髻と鬘とを別て書れたる者と聞ゆれハ打合ざるなり（傳二十三丁ハ右ハ結髪髻と有る縁ハて書れたる所なるを鬘をも一ハ訓と云理ハ且て有まじき事なるを思ふ可し又此二字を伊奈太吉と訓なるも心得ず髻鬘ハ頭上ハ在る物なれハ然云むも僻事ハ非ずと雖も其ハ歌なるゆゑの上ろ有けれ事実を正しく記さるゝ上ハて ハ麁きハ過なり と云べし　所以ハ又私記ハ又問案古事記云乃於左右御美豆羅又於御鬘亦於左右之御手各纏八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠云々然則髻與鬘自是別物也何得両字畳読哉宜読御美豆良伊奈太支歟と古人も疑ハれしハ然る事なり但此ハも鬘を伊奈太伎と

と読るハ迂遠し美二豆羅と訓て何の難ハ有む其
咎ハ今如此説者則髻髮當是相別但先師相傳唯説伊
奈太支爲先説又説美豆良爲後説古説之意暫不用耳
安氏説御美奈太支美豆良案此典古説相近也と有て
終ハ允當の訓を得ざりし者あり右の御美奈太伎の
美伊奈太支を切めて美と成りてハ若くハ御美の間
ハ誤字あるの有ハや此伊奈太支の事ハ傳十四卷百
二十八丁ハ云りき○髻ハ上百丁ハ云り借此ハ古事記ハ於左右
御美豆羅云こと有て其下ハ
御美豆良云こと有て左御美豆良云こと有る是を云ふ
り此御紀ハ(第三書ハのみ左髻とも右髻とも並有て此ハ)然る委しき事ハ見えざれども此下ハ

ハ茅三ノ書ハ此を
翠頭之瓊と有當
れり茅一ノ書ハも以
其頭所翠立百箇
御統之瓊と有て此ハ
相對へる所無く
打任せて云あり
猶此

乞取天照太神髻鬘及腕所纏八坂瓊之五百箇御統と
有れば此も同ト狀ある事申すも更なれば此ハ美こ
豆良と訓べきあり然れば右ハ引る秘訓の説の如く
義ハ和名抄ハ髻和名毛止と聞えざれば然ハ訓こ難し
も文の上下ハ相應ひて又述
字彙ハ髻綰髮也と有て髮の本を綰ぬ束ぬる其
を毛止と利と云て本より此字の訓ハて有あり○鬘
ハ美加豆良と訓べし古事記ハ亦於御鬘と有て其下
ハ亦乞度所纏御鬘之珠而佐賀美迩迦美而と見え此
も下ハ髻と並出なる事ハて次うも異ふ〳〵ざる者あ
り此物の事上章第六ノ一書ハ黒鬘と出たる所傳十百
十五(六十九四百十七丁)ハ云り○腕を(名義抄ハ宇傳とも多太年伎とも)多天佐と訓り然れども和名

抜み（多美佐と無くして）腕和名太ニ無岐一云宇天手腕也と有り又古事記沼河日賣の歌み多久豆怒能斯路岐多陀年岐須勢理毘賣命の御歌みも多久豆怒能斯路岐多陀年岐と詠せ給ひ高津宮天皇の大御歌み許久波毋知宇知斯流冨泥と士漏斯漏多陀年岐とも有み依て此ハ多陀年岐とあむ訓む可き（拳下見林）説み臂骨盡處為腕（久乃乎末）今俗云宇手久眉と有る如く掌際（ウデクビ）の所ハ掌を合すれバ共み此も向合ふ所あり然れバ手（タ）ハ向（ムキ）の義ある可し又宇天ハ上手（ウテ）と云事（手を肩より肘に至る所を主て云）ある可し又腕を加比那と云ハ肘を係なる名みて峽（カヒナ）の如く折屈む所あれバある可し日代宮

段み多和夜賀比那衣麻迦年登波と有を以知べし又多夫佐と云訓ハ手總と云事みて下みてハ掌と聞き指と支るとを此ハ總ねさる所の謂ある可し（神樂歌み瑞籬の神の御代より篠葉を多布佐み採て遊び舞うしも）と有ハ若くハ手草の誤みてハ非ト又誤みて無くハ俗み人の頭髻を多夫佐と云ひ其を搔むを多夫佐登流と云類みて手わて總ねさるを云みハ非るみやハ又後撰集み　折れバ多夫佐み織る立あぐら三世の佛み花奉る」と詠るハ全く腕を多夫佐と云るあめり

備茅三ノ一書み復名嬰頸之瓊著於左臂中（クムキウチ）云て又自右臂中云と有る臂（クムキ）ハ此の腕と一事あれバ論無きを古事記みハ亦於左右御手各纏持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠而云と有て下み乞度所纏左御手

（傳十九巻三百七十七丁考ふ可し）

之珠而云ニ亦乞度所纏右御手之珠而云ニ有て御
腕と御手とハ違へるが如し然れども熟思ふに古事
記ハ御手と書されとるハ唯廣く云れる者あるを
此ハハ其御手の中ハて瓊を纏せさせ御在し笠ける
其所ハ此と正しく指て云傳へるが故ハ腕とハ有ま
りけり然れば彼記て御紀とハ其旨の打合て次うも
違ハざれども或ハ粗く又ハ委しくも有て其記様の
一ならざるを以て係放れる事の如くも見ゆめる
者ありうし但第三ノ一書ハ左右の御足よりも神の成
出坐し事を記せるハ甚く異なる傳あり
又下章第三ノ一書ハ左右の掌の事有と雖も共ハ甚く
異なる事共ありければ各其所ハ就て辨ふ可くあむ

偖右百十六丁わも云る如く此瓊を裝ハし給へりしハ武
備ある可きハ就て猶考るハ古事記ハ所纏左御手之
珠又所纏右御手之珠と有る文を約れハ手纏と云事
と為る可し然れば伊邪那岐大神の黄泉軍と相戰ハ
せ給ひ還坐て後ハ投棄給へる物の中ハ在御手之手
纏右御手之手纏と有も武備の具と思ふしく又万葉
十五十三丁ハ和多都美能多麻伎能多麻乎と有る是ハ
て玉を纏る事著きを猶傳十二百四十一丁ハ記傳を引て孝
なる仁德天皇五十五年御紀ハ田道臣の死るれし所
ハ時有ニ従者取得田道之手纏與其妻乃抱手纏而縊死と

○纏ハ麻加斯佐と訓り本ハ麻都比佐と訓なれども上なる縛ノ字の訓ハ似て如何あり其上古と事記ハ纏持と有ハ餘り遠く成を以て然訓りき傳十八行ニハ云べし

有り又三代実録ハ貞観十二年正月十三日勅充壹岐嶋胄并手纏各二百具と見え和名抄射藝具ハ韜和名多末岐一云小手也と有れば愈以て武備の具なる事著明きを此ハ次ハ御靭御鞆又弓弭の御事見えたれば殊ハ手纏ある事著明き者なるを(天孫本紀ハ小手繦と有り)古事記ハ於て左右御手各纏持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠と有ゞりハ穴玉を貫通して其緒あゞり牽こと御臂の邊より掌際迄ハ纏持させ御在し坐し御事ある可し然れば右の古事記の如くハ手纏を製る支度を云るなるを又手纏と唯ハ云時ハ其物の名と成れるなり云様の異なるハ因て別なる物の如く人皆思ハ事あるべし

○背ハ傳十二百二十ハ二行

○背ハ古事記ハ曾比良と有て據と訓べし第一ノ一書ハ背上を訓り記傳ハ背平なり今背中と云ハゞ異なり和名抄ハ脊を訓るゞ當れりと云れき大同類聚方ハも楚備羅と有り

註せり○千箭此云知能梨ハ古事記ハ千入と書れたり其下ハ訓入云能理と註されき和名抄ハ箙箭竹名也和名乃と見え大神宮式神宝料ハ箙二千二百五十株と有ハ其神宝ハ征箭一千四百九十隻又箭七百六十隻と有る合せて二千二百五十隻の箭を造る料なり然れば箙ハ箭ハ非すして箭を製る材なり然るハ同抄箭の下ハ又笑字有て和名夜と有を神名式淡路国三原郡笑原神社の笑を能と訓と同抄郷名ハ讃岐国香川郡笑原乃良波と有るを此ハ箭を能梨と有ハ箭入(イリ)ある義なるを合せ見れば箭をも笑をも

共に能くも訓む字ありけり然れば能ハ元来竹名に
ハ有れども箭に作なるをも然云い夜と云ハ其鏃を
全くしなる名にて其来ぬあり（又盛あり）為るに猶竹名を以
て能くも云るありけり記傳七十七丁に千入ハ千箭入
の意なり五百入も准ふへて知べし千と云ひ五百と
云ハ其量（ホド）なり必千と五百と入べきに非ず唯多く入
る由なり」と所見なり（私記に化入千入千箭者皆是一
者不知入者皆何物故今此紀重言千箭則明入者是箭
矣即知言千載者是載千枚之箭矣云と有れども能
梨ハ箭入の義にて有けれ載に非ずハ〇靫ハ矢筒と云事なり天孫降
臨章第四一書に天忍日命の背負天磐靫と有る此を

古事記に取負天之石靫と作れなり神武天皇御紀
の天表に天羽二矢一隻及歩靫と見元孝徳天皇御紀
に大伴長徳連帯金靫立於壇右と有ど如此く石にても金にても製り被
立於壇右と有ど如此く石にても金にても製り被
用たるなり推古天皇十一年御紀に靫此云由岐と註
されば万葉二十巻に由伎と出なれば靫ハ由岐なる
事論ひ無しと雖も若古に由宜（ユゲ）とも云しに非るか
其ハ姓氏録河内国神別天神に弓削宿祢天高御魂乃命孫天
眤知志可氣流夜命之後也と有る字にて弓を削る
義なれども其出自ハ天日鷲翔矢命に坐て此ハ矢に

△右ハ云ヘ矢筒の義なるを思ふ可し中古ハ胡籙と云ひ後ハ唯ハ箙と云ひ又後ハ矢立とも云へり けり散木集物名麻ヘ後能夜多氐を三倉山枝屋連て住む民ハ年を積とも村ぶと思ふ と有り矢立てハ言の有を知へし 備

因れる神名あるを思ふ其矢を盛る筒をも作れり し姓ある如く所思れば云あり ゆければ共ハ作れりけく〳〵 備又弓削ハ弓祁豆利と見ても由宜ハ切り難ければ由岐ハい甚近きを以 今云 あり 備 釈紀ハ靫者是入箭之器也と見え字書ハ盛箭室と有り

記傳七 三十ハ六丁

太神宮式神宝中ハ姫靫三十四枚長各二尺四寸上廣六寸下廣四寸五分矢刺口方二寸九分以檜作之以錦鈿表以緋帛著裏著緒四處並用紫革長各二尺廣一寸三分箭四百八十隻以鳥羽作之蒲靫二十枚長各二尺上廣四寸五分下廣四寸以檜作之緒四處並用紫革箭一千隻以鳥羽作之革靫二十四枚長各一尺長各二尺廣一寸箭一千隻以鳥羽作之革靫二十四枚長各一尺八寸上廣四寸五分下廣三寸八分以調布黏之塗黒漆著緒四處並用紫革長各二尺廣一寸箭七百

△見え豊後国記ハ日田郡靫編御甘者磯城島宮御宇天皇之世日下部君等祖邑阿自仕奉靫部其邑阿自執於此村造宅居之因賜名日靫負村後人改靫編村云事也

六十八隻以鷲羽作之と有る此ハて其製様ハ知らるゝ ハ り若て磐靫ハ字の如く磐を以て作れるある可く歩靫ハ若くハ歩ハ堅ハ堅の義ハて右と同物あるハや金靫ハ金銅を以て張れるある可く姫靫の姫ハ姫松姫百合などの姫ハて麗美一き意と聞ゆれば錦を以て黏る名ある可く蒲靫革靫も皆表の裝を以云称ある可し備姓氏録朱定雑姓河内国ハ靫編首神志波移命之後者と見え祈年祭儀ハ但靫者靫編氏造之と有れば靫を作るを編て云るあり其ハ右の以檜作之と云如き事も古ハ函ハ製る事ハ無して搭あぐを編て物為なりけ

木ハて製れるハ對云あるハし紀ハ此も

文記傳の字鏡の
靫也奈久比と有
り和名抄の別の
能を夜奈久比と
注せりと見ゆ夜
奈久比矢之杭の
て其を杭とし矢
を盛立る謂なる
べや

む古名の傳いはるべき有べき矢作を夜波岐と云も
矢の鳥羽を刺て作れ
る物なるを其郎矢を作る名の成はるなるべ古の言語
様の大らうなりし事を思合す可し又通證の東鑑有
羽壺郎空穗義蓋
此遺制せて云り○負の第一の一書にも又背上負靫と
見え古事記にも負千人之靫附五百人之靫と有を記
傳七三十八丁に負の主と負ふなり附の側に添附る意な
りと云れたり備靫を負ふ事の右百二十三丁に引る負天
磐靫とも取負天之石靫とも帯金靫とも有の更なり
万葉三五十九丁に大夫之心振起劔刀腰に取佩梓弓靫取
負而又大伴之名負靫帯而九三十五丁に白檀弓靫取負而
二十十九丁に麻須良男能由伎等里於比豆又五十丁に於

保久米能麻須良多祁子に佐吉尓多豆由伎登利於保
世るなど有り七四丁に靫懸流伴雄廣伎大伴尓とも見
ゆ大祓詞に靫負伴男劔佩伴男と有に大伴物部両氏
の仕奉られし職掌に起る事已に其講義に委しく
註せり姓氏録大伴宿祢條に以大来目部爲天靫負部
と有も弓箭を取持て御門を衛る職を云り後に此
を停止られて六衛府の官を被置たれども和名抄に
近衛府衛門府兵衛府を由介比乃豆加佐と有に古の
大伴の職を襲へる故に猶古き称を被用たる者なり
然れば靫を負ふと云ハ唯に負のみを云ハに非す弓箭
を手携へて武さ備る爲る時の形貌なる者なり備右

の劔佩伴男と云ふ物部氏の兵士を率て仕奉るべし職あるが後世僅に東宮坊の帯刀あるの官名遺れるあり其ハ已に大祓詞講義に云り○臂ハ美比遅と訓べし和名抄に臂

謂之肱肘和名比知臂節也と有が如く肘節をこゝにいふ言ハ合聯ねて相連れる謂なる可し肱字ハ祈年祭詞

大殿祭詞あるに手肱に水沫畫垂あるを用ひたり和名抄居宅具に枅承衡也漢語抄云比知岐功程式云肱木

と有も肱の如く曲めるを謂なり又鈴屋翁説に此木ハ肘木の下略千木ハ肘木の上略と云も類たる故の名

なり名義抄に臂を多太年伎又比遅と有り釈述義

に也も右の両訓有て虽も敢ハ左肘より懸る物なれば

此れてハ比遅と訓むなるべしとする可き○稜威此云

伊都の伊都ハ氣突にして神氣の物を突く由なり

此に大雄稜威之雄誥発稜威之嘖讓と有なるは是なり古

事記に伊邪那岐命校所御佩之十拳劔斬其子迦具土

神之頸と有て其下に故所斬之刀名謂天之尾羽張亦

名謂伊都之尾羽張と所見たるも其御子を斬むと思

はしく疑しく給へる神氣の至及びて其事成しく給へる由にて称

たるなる可し此の天孫降臨章に稜威雄走神と有

る雄走て申すに一速き義有るを合せて思ふに可しく又

天照大神の荒御魂を撞賢木厳之御魂と申奉るも大

御勢の一速く至り進ませ給ふ由と聞ゆれば此嚴も
稜威の例あり但同じ嚴字なれども神武天皇御紀顯斎
の所なる嚴香未留嚴図象女などい清
浄なる意なれば其ハ伊豆と訓べし此清渭に依て右
の如く義も異なる所有り傳十卷三百六十丁見べし
天孫降臨章に排分天八重雲稜威之道別道別天降と
有ハ天雲ハ八重に立覆へる物なれば神の御勢以て
排分け衝別け速降らせ給へる義にて伊都ハ氣突の
意にて合へり又鎮火祭詞に御心一速比給波志爲氏
と有ハ火神を火之夜藝速男神とも申せる其意にて
此一も稜威と同じく有て氣突なり知波夜夫流も右
に同じき由冠辞考に説れたるハ然る事にて皆共に

神氣の突利く突き至り進む由の言なり其書にも云
古事記の伊登志和氣王を垂仁天皇御紀に騰武別命と書されたるも氣敏と云事にて其即心騰の雄健き
意なるを合せて曉る可き者なり然れば右の稜威之道別又ハ古事記
に伊都之男建蹈建而などハ其威勢を取給ふ御事業
に係れるを此の稜威之高鞆などの物名の上に冠らせ
云例ハ常陸風土記に普都大神の天に歸坐す事を書
せるに即時隨身嚴杖俗曰伊川甲戈乃川惠揖劍云て悉皆脱
履留盪茲地即乘白雲還昇蒼天て有る此嚴杖ハ稜威之
杖と云事なるか猶下へも係れるにて稜威之甲稜威
之戈稜威之楯稜威之劍と並べ云ふが如し斯る物名

の稜威の言を上の冠ふ〜せ置るハ右の例共と同じく其物の因て神氣の炎利く衝至る威勢を示す義なる者あり今日の上にても威勢の盛なる人の向ふ時ハ其氣に壓れて戒氣の伸る事能ハざるを以て稜威ハ氣突なる事を明らむ可し〜私記に稜威者是可畏之義也蓋古語謂加之許支爲伊都也と見えたる如く實に稜威ハ可畏き事にハ有れども可畏ハ此方より他の事を恐懼るゝ故稜威ハ此方の威勢を以て他を恐懼れ〜むるにて有れハ可畏きを稜威と云も皆其正しき旨を得ざる者ところ所思ゆれハ通證に漢書李廣傳威稜詛李奇曰神靈之威曰稜潘岳誄稜威可厲懦夫克壯と見えたり各義物に稜を曾婆又加柿又布流布と見え威に於柿須とも於曾呂志とも加志古麻流とも典曾保比とも加賀夜久とも伊加未志とも云訓有あり○高鞆古事記にハ竹鞆と有り竹ハ借字高ハ正字なり記傳七三十九に鞆ハ音物の省のたるにて竹鞆ハ高音物の義なり物の能を省くハ作物所を都久毋所と云例なり偖此ハ何の料に著る物ぞと云に古歌などにも鞆にハ皆音を云るを思へハ此物に弓弦の觸て鳴る音を高う〜令む爲なり音を以て威す事彼鳴鏑なども同じ然るを師ハ袂を押へ弓弦を避る物なり故に弦の當る音有りて云れつる已も先にハ

然る事と思ひしを後に熟思へば然れは非ず近き頃
伊勢貞丈も音の為なりと云ひ其考に或以為鞆是避
弦之具也是本于和名抄鞲字注者而非也夫弦觸腕者
拙射之一癖也何有設其具乎云り実に然る言なり
取意と有が如し通證に倭名抄曰蔣魴切韻云鞲在臂避弦具也和名止毛揚氏漢語抄日本紀等
用鞆字俗亦用之本文未詳説文云韝射臂沓也和名多
末岐一云小手也鞆典小手別物可以見云云字彙補鞆
未詳見呂氏春秋疑登毛則本朝之所制也字書皆云鞲
射韝以皮鞲臂然則鞲亦鞲也源氏訓導止毛者恐誤
と有ハ云れたり今名義集を見るに鞲を登毛と
訓たれば引れる和名抄より以前に已に誤れる者あり又記
傳に大神宮式神宝中に鞆二十四枚と有る細書に以
鹿皮縫之胡粉塗以墨畫之納檜麻笥二合徑一尺六寸

五分深一尺四寸五分著緒一處用紫革長各一尺七寸
幅二分と見えたるに右に寸尺を云るに麻笥の事に
して鞆の寸法に非るを長暦大政官等に御鞆口長四
寸五分九徑四寸厚二寸塗黒漆畫平文附村濃組有金
銅金物と有り兵庫寮式に熊革一條鞆料長九寸廣五寸牛革
一條鞆手料長五寸廣二寸と見に然れば鹿又は熊皮を以て
作る物なりけり右の胡粉塗以墨畫之は江次第に謂
ゆる鞆繪の事にて巴紋を云なり出雲風土記秋鹿郡
惠曇郷條に須佐能乎命御子磐坂日子命国巡行坐時
至坐此處而詔此處者国稚美好有国形如畫鞆哉吾之

宮者是處造事者詔故云惠佯神龜三年改字惠畫と有も其より
已ゐ既く鞆ゐ畫く事の有ける為り通證ゐ一書曰今
所敭伊勢神財鞆其形如瓢黒漆以銀粉畫巴紋表裡各
一也と云り吉部秘訓抜ゐ圖る形正ゐ右の如くあり
巴ゐ何ゐ據と云事を知ず天信信景が塩尻ゐ二巴い
雲の古字あり三巴い雷の古字ありと云れども神代
ゐ然る文字有べくも非れば如何ある說あり平田翁
の赤縣太古傳ゐ鞆を登毛と云ひ其形巴ゐ似たる故
の名ゐて末あり然るゐ巴字を登毛惠と訓て鞆を畫
る圖ゐ似たりと思ふい違へり巴字說文ゐ蟲也或曰
食象蛇象形と云ひ徐說ゐ按博物志巴蛇吞象と云れ
ど水流曲折三回如巴字と云る義ゐ依て登毛惠と い
訓ふ〳〵む〵と云れつれども心得ず古より水の渦ゐ
が如く畫末れるゐ定りたる事ある故ゐ鞆の畫と云
意ゐて呼剝
たるゐこゝ備上ゐ云る如く天照大神の御裝束い

△惠ひしーうども其ハ此の点ハ名井ゐ起れる事ありけり傳十七巻四十三丁ゐ云へし

も左右の御手ゐハ彼ハ坂瓊を御手の手纏ゐ纏給ひ
て形の如く大御身を固めさせ給ひて武備を厚く物
参させ給ひ然して其ふ刀弟を防給ふ料ゐ此ゐ稜
威之高鞆を着させ給へるい御弓を放たせ給ふゐ稜
威の高き音を取せ給ふむ料ある可き事申すも更ゐ
第二書ゐ著稜威高鞆手捉弓箭親逆防禦と有を明らめ又
り天孫降臨章第四一書ある天忍日命の出立ゐ背負
天磐靫臂著稜威高鞆手捉天梔弓天羽二矢及副持ハ
目鳴鏑と有て靫を着るハ今矢を放む備ある を見よ
うー特統天皇七年十月御紀ゐ自今年始於親王下至
進位觀所儲兵と有る兵器の中ゐ甲大刀弓矢を云て

次に鞆一枚と有り又西宮記に天皇欲御射時侍臣一人候御座南方奉御鞆張御弓又持御矢と有り天平勝宝四年御紀に京畿諸国鐵工銅工金作甲作弓削矢作桙削鞍作鞆張等之雜戸と有に依て鞆を造る者を鞆張と云りと記傳に云り此り神名式に近江国高嶋郡鞆結神社和名抄郷名に鞆結と毛田比と有る是なり然らば鞆張は革を製る工人を云ひ鞆結は組を以て縫ふ伎者を云るにこそ又備後国世羅郡鞆張郷有り然る後国深津郡に鞆浦有り神名式に須佐能袁能神社其地に御在し坐て疫隅社と云ふ其事傳十一巻三十五丁に云り其地主神と傍に鞆神社坐り其原氏の八幡本紀に所祭船玉命神功皇后西海に赴りせ給ふ時舟

（方葉三に鞆浦之有て二首共に宴宋を詠とせに鞆之浦四と詠なると二首有て古き地名なり）

楫を橋へ兵食を畜へて其地の渡と云所に坐して鞆を以て神宝とし給ふ云こと云り此は世羅郡と程隔れる所に有り有は鞆張郷の由に非ずと雖も若くは其鞆張が調進れるを召させ給へるを納めて祭らせ給へるより神社の名にも地名に成れるにこそ偖鞆に因れる故事は皇太神宮儀式帳に大宮處の事を称へて朝日来向国夕日来向国浪音不聞国風音不聞国弓矢鞆音不聞国大御意鎮坐国止悦給豆大宮定奉支て宣ひて弓弭の騒無き事を其一節と成給へり万葉一二十八十和銅元年戊申天皇御製歌に丈夫之鞆音為奈利物部乃大臣楯立良思母と有は武事を調練へるに就て其音を聞食し由にて其程東夷の征伐共の事有が為に大御心安く御

在し笠ざる由あり故御名部皇女慰め奉りて吾大王
物莫御念須賣神乃祠而賜流吾莫勿久尓と云奉和〳〵
れし〳〵あり又七十六丁に大夫乃寺二卷持在鞆之浦回字
と有を鞆を著る事に係たるあり又通證に源俊頼朝
臣の詠賭弓歌に引鳴す手束の弓の矢を速く鞆音に
的の鳴交すあり」と云歌を引て顯昭云用眞卷弓懸鞆
倭名抄唐韻簿今云細射弓箭和名萬二岐田美江家次
第作眞卷弓矢年中行事賭弓国可以見懸鞆之體也と
云り偖此の高鞆を古来多加賀良と訓る事更に謂れ
無き事あり又應神天皇御紀に上古時俗号鞆謂
褒武多雪と有も論有る事あり今此に云ふも煩〳〵い
ければ其御卷の傳に就て云べし先に傳の誤と心

得たるむてる目易
りぬ可りりにれ○著に都久と訓べき所あり然る
に此に更あり第一一書に又齊著稜威高鞆と有も右
に引る天孫降臨章第四一書あるも著字を皆〳〵に
波久と訓て應神天皇御紀に宵望太伯為雄裝之負鞆
と有る負字をも波伎多麻布と訓て字に著と負と異
ありて亟も其訓の同じきに必古より受る所有りて
の事と通ゆれば波加斯氏と訓べき所あれども上よ
りの語勢を考るに猶足はざれば古事記に所取佩伊
都之竹鞆而と有に倣ひて登理波加斯氏と訓べし其
所取佩を記傳に登理波加斯氏と訓べき由に註され

かれども右の如き例も多うるが上に佩字其記に所
御佩十拳劒と有り大祓詞に劒佩佩男とも有るを波
久と訓む字あるに依て今改るなり鞆は凡く縫て臂
を指入る物なれば沓を履く草鞋を著くの波久是な
り大刀を佩と云も同しく大刀は帯に指す物なれ
ども然は云はぬ如しと雖も帯に在れ何
處に在れ其指す可き所に履く意なれば其も亦同じう
むとぐ所思ゆる然れば波久と云は穴の如き所に
物を指入る名なり箱を波古と云も亦其波久に異ならず○弓蒲は由波受と訓り
神武天皇御紀に有金色靈鵄飛来止弓弭と見え
崇神天皇十二年御紀に有る男之弭貢を古事記には
男弓端之調と有り万葉二十三四丁に取持流弓波受乃騒

ムり文建久行事記
三節祭琴御弓の歌
に阿波利矢弭波須
度万宇佐奴と有
る弓蒲の例なり右

と有ム　同ト蒲字名義故に由美波受と有は本語の
任なる可し和名抄に弓所以遣箭之器也和名由美弓
末曰蒲和名由美波数中央曰弭和名由美都加と有り
字書に弭弓稍末也と注し蒲弭頭也とも有を此には
弭も蒲も共に由波受に被用たるが言義は波受は端
末の略語なる可し俗又古節用集に蒲を宇良波受と
訓るは末弭なる可く弭を母登波受と有は本弭の義
なる可し此に就て思ふに万葉一八丁中皇女命の御歌
に御靴乃梓弓之奈加弭乃音為奈利と二所有る奈加
弭は中弭にて弓弦の係る間を云なる可き事右の

末弭本弭に對へても中弭とも云べきを知べし　又十六
卷に佐男鹿乃来立来嘆久云こ吾仇者御弓之弓波
受と有に苔の事と通ひ和名抄に箭受弦處也夜波
須と有り此も矢の端末なりければ然云るを夜を由
に轉しても云事にて上にも云る如く報に知箭なる
を由岐と云に同ト然れば弓の由波受と矢に云
ふ由波受と同言にて有れども来る處別なり　偖此
弓弭を古事記に弓腹振立と有り其腹は万葉に
梓弓より春と続け又は白眞弓張而懸有なども云る
張に同じくして弓を張たる中程を見容て云るにて
祝詞に甕上高知甕腹滿雙なども云ふ腹此に同し　弭の
の上なるに對へて　弭の邊の張擴りたるを云称なり
弓は常に伏て置く物なるを事有る時は引起し用ふ

るが故に振立と云ふ云るなり　記傳に引れたる万葉十
三　二十三丁に梓弓弓腹振起志之岐羽矣二手挾十一二十六丁
に梓弓末之腹野尓鶯狩爲君之弓食之將絶跡思甕屋
と有る梓弓は末と係れるが本より腹と云事も有故
に原野之末と云事を錯綜して用ひたれし者なり又
三　三十四丁に大夫之弓上振起射都流矢乎七三丁に大夫之
弓上振起借高之なども有る弓上は由受恵と訓て此は
右の弓腹とは同ようらず此の弓弭を云る事上に云
る事共に合せ考ふ可き者なり右の弓腹の説は此に
らざれども記傳に右の十一卷の歌を弓末に腹と称
くる處の有し故に末之腹とは連けたるなり」と説誤

られたるより其説完當を得ざる事の惜しくて如此説直せるあり然れども甚畏くい有れども道の為にざるを得ざるあり○振起は古事記に振立と有て同じ古事記に振條天之真名井と有て同じ

に引る万葉の振起を何れも布理多比と訓て此ある

をも然訓て立て起るは意も然のみ異らざれども記

傳に引れたる万葉十九十四に梓弓須惠布理於許之

投矢毛知千尋射和多之と詠る的證も有れば此は其

に因て訓を定めたり此は唯御弓を御手に執給へり

し御事あるを振起とも振立とも云は今も引放ち給

ふ可く勇み進ませ御在し坐る所あるが故に振とは

云るにて揔て振とは物の奮ひ動くを云事下百十

に云を合せ考ふ可し然れば唯弓を起すとも立るとも云て放つ可き勢無きを振

の言を以て其形狀見るが如く通えたり万葉一巻に

朝庭取撫賜タ庭伊縁立之御執乃梓弓之云と有る

立は用ひずして休め置を云あれば唯に伊縁立之と

は詠坐るあり立の言は同じきあれども其重語に因て

異る事なる振は傳十百七十四丁に云るが如く上章第六

一書に投劒揮背と有る揮あるも此例あり下に濯於

天真名井と有る濯を古事記に振條天之真名井と有

も動揺し濯ぐ由あり又中巻天之日矛が持渡れる宝

の中に振浪比礼振風比礼と云物の有も万葉二十八丁

に朝羽振風社依羽振流浪社来縁と見えたる如

く浪風を動揺らす器の名あり又天原振放見者あど

多く有も直向ひて瞻る由なくず天原ハ極めて遠き故ハ左見右見振仰ぎ見る謂あるあり斯れば振某と云語ハ皆右の如き義有て振ひ動揺く意あるを合せ知べし然れば此の振起あるも御弓を起し立て直ハも射させ給ふ可く振り動揺せ給ふ義ある事著明き者ありうし 名義抄ハ振字を布流布とも宇碁加須と共流とも此良久とも志多賀布とも袁佐年とも須久布とも登ニ能布とも尓伎設布とも須都とも又有り ○劔柄此一條ハ古事記ハ見えざるを此ハ在て甚美たし第一ノ一書ハも乃設大夫武備弸帯十握劔九握劔八握劔て有が如く此ハ武備を裝ひて待せ御在し坐す所ハし有れば必御劔を取佩せ御在し坐す事(無く)てハ得有まじき所なる者あり然るハ 劔ハ近き仇を討つ物あり弓ハ遠き敵を射る具あるが故ハ相共ハ備持つ事(今も)古も常ハ然る事あり此ハ弓劔の具有のミなくず第一ノ一書ハも然有を以て共ハ調へる美たき傳てハ所思るあり天孫降臨章第四ノ一書ある天忍日命の武き備もら劔とのニハ過ざるあり纂疏ハ弓者左手振其靫劔者右手握其柄と有ち御説の如くなくざれば武備と ハ申す可うくざるを思ふハ古事記ハ末ハ建(乞度)須佐之男命所佩十拳劔云と乞度天照太御神所纏云と之珠

と有て　（太神の御方の御劔御在し坐す素戔嗚尊の勾璁の御在し坐さる照在六）有れども此は第二の一書の天照大
神謂素戔嗚尊曰以吾所帶之劔今當奉汝汝以所持八
坂瓊之曲玉可以授予矣と云傳も有て此物根の正説
あるが如此く御劔を渡し給へるの就ても日神は本
すり劔を佩せ御在し坐し事を知べし其上此の急揵
劔柄と有て下の天照大神乃索取素戔嗚尊十揵劔と
有れば假令物根を相交易させ給はざるの有れ素
戔嗚尊も本すり帶させ給へる者なるをや然れば彼
記の本傳の弓腹振立と而堅庭者云ことの間の取
揵御刀之手上而と云ふ八字の有けむも知べからず

然るを何故の脱たりけむと云の右の云る如く下の
天照大御神の須佐之男命の御佩せる十揵劔を乞度
し給ふ事の有ず故の却りて此の在るを誤ちりして
削られたるのも有べし古史成文の此を弓腹振立劔
之手上取揵而と書れたるい
然するの其意を得られたり偖劔柄は上章第六一書
の見えたる劔頭の（ツルギノクチ）と古事記の御刀之手上と有る是
あり其事傳十百七の云るを猶云はば多迦比は多迦
美の音の通へるあり釈述義の　日向風土記の宮
埼郡高日村（音）者自天降神以御劔柄置於此地因曰劔柄
村後人改曰高日村也と云を引て神世之昔以劔之柄
稱多加比以之可知也と有は然る説あり万葉九三十五丁
の焼大刀乃手頭押祈利白檀弓取負而とも見の和名

△庭地の堅きを云ふ然堅き處に蹈めども凹まぬ者あるを此極き御勢をこゝにさせ給ふとして此云てこの事ゆへ及ばせ給ふ事

拔ゆ攤知名太知乃豆加劔柄也考工記云劔莖人所握鐔以上也今按攤也と有り名義拔ゆも攤を多知能都加とも都加とも見えたり豊昔已く○急握ハ神武天多加比とハ世ゆ云ざりしゆゑろ

皇御紀乃ゆ撫劔而雄詰之曰慨哉大丈夫云こと見えたる所ゆ撫劔此云都盧耆能多伽弥屠利辞魔屢と註されたり古事段ゆも即握横刀之手上矛田氣矢刺而追(記同)

八之と(と有る其を御紀ゆハ宰劔と記されたり)何れも甚く慷慨と雄健ひて劔柄を固く握り締る事を云ふ(ハ其神ゆ對ひて劔柄を握搦へ給ふゆゑ)甚く事の迫れる(所ある)故ゆ急き握と有(字ある)

者あり名義拔ゆ握を尔岐流とも登流とも世都とも都加年とも見え撫ゆ左傳ゆ撫劔從之と有を取ぶれるあめれども○堅庭ハ古事記ゆも有り素此ゆハ次遠うるゆや

戈鳴尊を待迎へて防禦ぎ給ハむ為ゆ平坦ある地處を豫て蹈踏(フミフミ)し置せ給へるを(以て然)堅庭とハ云ある可し此ゆ其事有て次ゆ故尔各中置天安河而宇氣布と古事記ゆ所見たる有狀辭へバ崇神天皇十年御紀大彦命を遣して武埴安彦を令擊給ふ所ゆ則卒精兵進登那羅山而軍之時官軍屯聚而蹈踏草木因以号其山曰那羅山と有ハ此ゆ蹈堅庭云こと有ゆ同じく又其時の事を古事記ゆ其建波迩安王興軍待遮各中狭河而對立相桃故号其地謂伊杼美と有ハ右の御宇氣比の時の御狀ゆ似たる事あり此を以て其趣を想像奉る

便宜とハ為べき事なり日神ハ未素戔嗚尊の黒白を所知省ざりし御時なれバ化て御事御軍の裝ひハ御在し坐けむ事申すも更なり然れども通證なも引る天書ハ此時の御事を結髪為髻引裳為袴以千束之鹿葦為衣なるハ偽なり本朝事始ハ甲本朝製天梼鹿之華用之始天押雲命製也と有れバ御天降前後ハ始て具足共ハ出来れるなり其上日神の華衣を著給ふなどゝ云事ハ甚こ信られぬ事なり今ハ門屏の内を庭と云事なれども古ハ然のミハ非すて家ハも外ハも廣く平坦なる土地を云を本として海ハても浪風の平穏ハて水面の平坦なるを庭と云事常なり

應神天皇六年御紀ハ天皇至菟道野上而歌之曰と有る大御歌ハ知婆能伽豆怒塢弥例磨茂と智儴蘆夜珥波毋弥喩區珥能明毋弥喩と有る諸注悉く當らず知

婆能ハ千葉之ハ発語なり伽豆怒ハ葛野ハて山城の地名なり今の京の邊を云ふ茂と智儴蘆ハ百千足なり以上諸説同じ但百千足ハ百不足の反ハて弥と云む発語なり其ハ百不足ハ八十又ハ五十なりの発語ハ置て此ハ八十五十の百の数ハ充ざるを云事なるが百千足より夜と続くハ弥の意ハて百千足を猶幾倍も重ぬる義なり儲夜珥波ハ弥庭ハて平坦なる地の甚廣きを云て然る處ハ国の眞秀なる物なるが故ハ區珥能明毋弥喩と ハ謡ひ結めさせ給へる者なり此夜珥波を通證ハ矢塚見也兵士多也と説き記傳ハ家庭として人家の多在る由ハ説ハたる共ハ薄遇へり又區珥能明ハ国之秀なる

を釈ム国府見世明典不五音通ゐゑ云るハ殊ム拙き
説ゐゆ府ハ国衙の所在を云ハ然る物ム て後の事ム
るを未漢字の全く行ハれざりし以前ム府の字音を
詠せ給ふ可くも非る者をやヒム景行天皇十七年御
紀の大御歌ムも夜摩苔波区珥能摩倍羅摩と謠せ給
ひ猶神代ム磯輪上秀真国と云号有る其事を何と
説ムと為る猶國名の丹波も古丹後と一ゐゆ時よりの
名ム て和名抄ム丹後国丹波郡有り其郡ム丹波郷有
り其ム起れる地名ある事国号考ム云れたるか如し
偖此丹波の多ハ発語ム て物を甚しく云辞ム て字音
ゐれども太又多の義ム遠ゝ ず迩波ハ例の庭ゐる
可くや今地理を予親しく見て考るム両国共ム大方
ハ山国ゐるム右の丹波郷の邊のミ山も打開け平坦

ある地ゐるム故ム丹波道主命ゐゑも其地ム御在し
坐て国府の如き處ゐゆ しゐゑ思ふム必多庭の義
ゐる可く所思内又尾張国丹羽 迩波も庭ゐる可く下
総国印幡も五十庭ゐる可く石見国迩摩も庭の轉ム
ハ非るゆ美作国大庭 於保無波ハ字の如くゐる可く此等
の外ムも庭某々云ひ何庭々之地名有ハ何れも平坦
ゐる義ム本着ける事を合せ考ふ可し又海上の平和
ゐるム云るハ万葉三十六ム飼飯海乃庭好有之又武
庫乃海船尓波有之十五ハム武庫能宇美能尓波余久
安良之ゐゑ有ハ何れも陸ム庭と云ム異ゐゑ

る者ありて其本一あり〻と知べし　如此く陸にも海にも庭と云事の多在るを以て皆平坦なる義なり云語なるを知べきなり門屏の内に限て庭と云事に限るなく庭字なりぬるは泥める説と云べし又此に就て思ふに知名抜国名に出羽以天波と見えたるは出羽郡に起れる国号なるが姓氏録山城国皇別に出庭臣見えたり此も庭なる地の餘り出たる狀より号けらる所にして出庭と書るは正字なり若て天孫降臨章第二一書に斎庭之穂と云事有る其斎庭は後に謂ゆる大嘗の斎場の事にて俗に場所と云事なり有れども其も斎殿を建又其事を行ふ舎宅を構ふるを本として云ればこれも上に云る庭の例なり又神武天皇四年御紀に立霊時於鳥見山中と有る霊時は斎場と云事にて其山中を平坦して立給へる謂にて此將上に同じく又万葉四十八に庭立麻手刈干八五十に且者庭に出立十六に夜子寒三朝戸子開出見者庭毛薄太良に十二に待君常庭耳居者十四に三十に小尓波尓多知惠府須我可良尓七十二に安佐尓婆尓伊底多知奈良之暮庭に敷美多比良氣受佐保能宇知乃里字行過二十二に小尓波奈加能阿須波乃可美尓古志波佐之あるは有に皆門屏の内を云るにて常に云る庭是なり然れども居宅を構るは先其地を平坦にして作る事なれば此も本一異なるべし偖言義を思ふに庭は平廣の切れるなる可

〇右の十七巻あるを朝庭を出立平ト夕庭を蹈平げずと云るハ更なり事ハ違へれども上を引る蹈跡草木を云なり平山(ナラヤマ)と云地名の起れるなどを思ふを必然る義を因れる事決き者なり古事記八千矛神の御歌を尓波都登理迦祁婆那久と有り朝倉宮殿大伝の御歌を尓波須受米字受須麻理韋弐と詠せ給へる八人家の庭を親しき物なる故を庭某と云なる可く又神名の庭津日神ハ庭火神と申す事なるなどを思へハ家の庭(打仕せたハ平坦なる者なるを依て云事なれども其のことを限らず)広く平坦なる處又ハ平和なる海をも(共を尓波と云事)云事(ハて平廣の義より其言の成れりけるとなむ見えたりけ

る庭字切韻ハ壁前也と注し字彙ハ門屏之間曰庭と有り場字ハ師古云掃地平坦為場と云ひ韻瑞ハ(北)敬未圃也と有て庭と場と字ハ異なれども言ハ何れも庭波わて一なる者なり記傳七巻堅庭の下ハ某場と云時ハ場を婆と訓ミも尓波の轉れる言なり大庭をも意冨婆と云り然れが今此の堅庭も佑言ハ其場所と云ハ同じきなり」と有り〇蹈ハ布美とも布美奴伎弐とも両訓有る今ハ後の方ハ従ふ可し私記ハ問如(ニ)或説其意易(ニ)今云奴岐者其意如何答云奴岐者即貫之義也言蹈貫堅庭至(ニ)于二股也読貫次略故云奴岐其意又同と有れども布美ハ唯蹈なり布美奴伎ハ蹈貫ハて其義異なる者なり其蹈貫ハ太神宮(祈年祭)詞ハ磐根木根履佐久弥氏と有る蹈四と(似たる言ハて堅き)地を蹈四める事ハて猛威を

△靈異記に童子の力強きが人とかるを爭ふ所に小子立投石之處小子之踏深三寸踐入と有るは正しく此に當る事多者歟

示給ふ爲に然る事い爲させ給へゝり者あり△景行天皇十二年御紀に天皇祈之曰云に將蹈茲石如柏而拳爲因蹈之則如柏上於大處(故号其石曰蹈石也)て有が如く堅庭を蹈貫せ給へゝり御威勢い如何に可畏く御在し坐けむ熹戈鳴尊の昇天に瞑渤山岳を鳴裏して參向ハせ給へる(て威猛き御勢を見せ給へ)に對へ る御所爲ある御事をあむ想像り奉る可つりける今も神力の時あるに各相共に足を拳て立合ふあるに實に堅石を○踏貫と云べき勢あり其力を身中に充滿しめ然後に此ハ其に依て年加毛こて訓来れり祈年祭詞大忌祭詞等に手肱ふ水沫畫垂向股ふ泥畫寄氏と有り私記に向股猶兩股也兩股是正相向故云向股耳と有り如し和名抄に股毛こと有り偖毛こハ桃ハ諸實あるに同じく諸身の約れるに両股の相向合るを云ある可し名義抄に股を毛こ又宇知毛こ又宇知阿波世と見え腿をも毛こ又宇都毛こ又宇知阿波世又都夫志と有る宇知毛こハ私記に或説向股者是内股也両股正相向當之方故云向股と有を此説非也と見えたれとも毛こハ内股の相向合るに出たる言あれハ向股即内股あり又宇知阿波世と云も股の打合たる意又都夫志ハ總内股の肉の相て紡る由あり偖私記

（此ハ向股ヲ云事古事記ハ天字ヲ文畫夏命ノ爲神懸而掛出胸乳裳緒忍垂於冒登也ト有る狀ハ等しく物ハ強く進める時ハ我を忘れかる如くハ斯る事ハをれるハて大ハ

右の内股の說を尤めて蹈堅庭陪股者當是内外共陪何得内股既陪外股不陪故乃非と有る一通ハ然る事の如くハも聞ゆれども然らず内股ハ陰所の邊なれハ然る所ハでハ陪るおゞき事あるを其猛威の進ハせ給ふ位ハ其所迄も恥敢させ給ハず蹈陪れさせ給へるが甚しき事ある故ハ其内股を以て言ハ成せれども其実ハ内外共ハの意ハて深味有る所ある者ハり祝詞あるも農作をカむる事の甚しき由を知らせたる者ハて唯股と云べき所を向股と云ハ然る義有て云るあり又上ハも云る如く曉ハ手と向ある向も両手を合せて内方ハ向あり記傳七

卷向股條ハ字鏡ハ蹲脛腹也古年良又年加波又拾遺集物名ハも行縢を隱して向脛と詠り僻案板ハ年加波岐ハ化人の向ひ脛と云事を詠るハやと見ゆ何れハ古言あり」と有ハ但向某と云ハ向ふ内方を以て称たる者なる事右の如し ○陪ハ於登斯伊礼比と訓べし本ハ布美於登斯と訓と釈ハハ古事記の蹈那豆美と同トく訓たれども蹈穿厚地陪入両股也と有る御說あハ目易くて宜しからけれハ從ひ訓つ万葉十九三十ハ天雲辛富呂尓布美安多之鳴神毛云こと有ハ天雲を綻ハ蹈落しと云事ハて此の蹴散し給ふ狀ハ似たる云樣あれハ於登斯とハ定ハ云べき所あり伊禮ハ御股迄蹈入させ給ふ御事あるゞ記傳七四十一

△あり殊に十九二十に落雪子腰に奈豆美武考未之と有ハ事に別あるにて有ハ共も此に堅庭を沫雪の如く蹶散し給ふ状なども思合す可き事なり

此の蹈堅庭而陷股と云文を引れて其上に蹈那豆美八日代宮段倭建命の天翔坐る時の歌に阿佐士怒波良許斯那豆年又宇美賀由兼婆許斯那豆年又仁德天皇三十年御紀大御歌に那瑠波譬苔須儒赴泥苔羅弃許辞那豆漈曾能赴泥苔羅弃於明漈赴泥苔礼万葉十三二十に夏草乎腰尓莫結あゞ此等の許斯那豆年ハ篠原又海水又夏草に腰まで没を云ふ然れば御足を堅地に蹈入て御股おで地に入を云て甚も御力剛く勇健く坐す状なり要と云れたるが如く此の陷入ハ右の那豆美の義に近き語なる者なりし然るに私記に右の蹈を

△伊足石歌に伊可奈留夜比止尓伊麻世可伊波乃宇閑辛都知止布美奈志阿止乃祁留△牛多布乃久毛阿留可と有と此所に甚能似たりける事なり倩

蹈貫と訓む事に就て問古事記に於向股蹈那豆美今如此文者當蹈那豆美也何其可用答今此欲言威猛之勢故云蹈堅庭如沫雪而更云那豆美於事頗劣也故不依古記是先師之説也今亦依之と云て上の蹈に然訓ざるが故に此陷字に登りて蹈那豆美と訓たる義に於ては然る事なれども布美奴と言の重れば如何なり陷字に名義抄に布美て言の重れば如何なり陷字に名義抄に於都又於知伊流又於知流又志豆年又久保年又布年又伊流なども有れば於登須とも於登斯伊流とも有れば活機うしと云れざるも故於登斯伊礼氏とも訓を定めたるなり○若沫雪ハ万葉五三十に水沫奈須微命母と有る如く堅庭を蹈貫き給ひ御向股を陷入て蹴散らうし給へば堅き巖石なども摧散る事の脆くうし事を雪に譬へたる者なり○上百四十に引る蹈石の御故事ハ更なり古事記明宮段に所見たる以御杖打大坂

道中之大石者其石走避と有が如く石等ハ現人神の
御所為ハ有けれども古神氣の眞盛りハ御在し坐
し間ハ斯る例さへ多在り況て天地の間ハ二無く
甚も至尊き日大神の此の御事ハしも幾許か可畏き
御事ありけむ如此傳たるだハ甚しき御事かれと猶千
重の一重ハも足ざるとなむ想像り奉るれける記
傳ハ引れたる源氏行幸卷ニ十ハ丁ハ御心を鎮めてとろ
堅き巖をも沫雪ハ成し給ふ可き御氣しきなれば」と
書るも實ハ此の故事ハ因れる者なり此文甚愛乃紀記共ハ堅庭
と有ハ唯土地の堅き場所を云なるハ此ハ堅き巖
を沫雪ハ成し散し給ふ事ハ云るハ紫乃自の當昔然

る古傳を載たる古書も有けるあめり然れば作物語
として漫ハ捨べからざる者なりけり此一事ハ寔ハ千
古の賜物と云べし万葉ハ梅花の散を雪ハ譬へて五十八ハ伊
母我陛迹由岐可母布流登弥流麻提尓許と陀母麻我
不鳥梅能波奈可毛ヤ七十九ハ御苑布能百木乃宇梅乃
落花之安米尓登妣安我里雪等敷里家年あど有ど如
く堅き巖共の摧散を雪ハ象りて傳たる者なり二十二
丁ハ雪之摧之彼所尓塵家武とも有れば若沫雪ハ實ハ
其摧散る事の譬ハ被用たる者なり若て記傳ハも云
ハつる如く沫雪とハ唯雪の事なり万葉八十四ハ沫
雪香薄太礼尓零登見左右尓又十七今旦零四沫雪ニ

古くハ古事記に河日賣命又須勢理毘賣命の御歌ハ阿和由岐能和加袁流流年泥速と詠せ給へるを始として

相而又五十四丁沫雪保杼呂保杼呂尓零敷者又五十五丁沫雪
尓所零開有梅花又五十六丁十二月尓波沫雪零跡不知可
毛又五十七丁沫雪乃比日続而如此落者又五十九丁沫雪之可
消物乎又沫雪乃庭尓零敷寒夜乎十七丁鶯之翼乃白妙
尓沫雪曽落又五十九丁子松之末由沫雪流又六十丁沫雪者
今日者莫零又出見者沫雪零有庭毛保杼呂尓又六十一丁
峰之沫雪寒零良之又沫雪千里零敷十六十一丁沫雪
之零也来坐ゐども有て右等ハ白雪と云換ても何
の妨も無き所なれば何れも唯雪と云事なり若て沫
と云義ハ和名抄ハ日本紀云阿和由岐其弱如水沫と有ハ

※此ハ私記ハ沫雪是雪之脆弱者也其弱如水沫故云沫雪と有を云るなるべし此ハ

て明るけし然れば雪を白雪と云ハ色を以云ひ眞雪
と云ハ沫雪の文を云ハ迫くして容易く難解き狀ハ
るを沫雪とも云ひ實ハ晩く速無き由ハて止ハ堅
庭と云ハ對へて沫雪と云て片方ハ極めて剛く片方
ハ極めて微き事を相戰ハせたる文ハ有ける斯
る例古語ハ多左ハ祝詞ハ弱肩尓太多須支取掛氐持
田麻波利仕奉礼留云ての類是ハ
ハ向の神を尊奉りて殊更ハ謙退りて弱肩と云て文
を抑へ其より神事ハ仕奉る事の堅到ある志を見せ
奉りて太祷と云て文を起せる者ハ是ハ依て其
ハ云列ぬる事の二ゐ〻ハ活き立て其心も深く厚
く聞ゆる○以字下へ附て此ハてハ訓べうゝず○楚
が如し
散公下ハ鬱散此云俱鑑鑑羅と箇須と注されたり

※御足以て逆踏正給ひ堅庭を書の如く散し給へるを云ふ

古事記の蹶散も記傳ハ其ヲ因て訓れたり纂疏ニ
蹶散者蹶蹈而散乱也此一句形容雄壮之勢耳と有ゴ
如し此言の例ハ古事記天若日子段ニ切伏其喪屋以足蹶
離遣也と有り垂仁天皇七年御紀ニ當麻蹶速と云人
名有て則當麻蹶速與野見宿禰今捔力二人相對立各
拳足相蹶則蹶折當麻蹶速之脇骨亦蹈折其腰而殺之
と見え上ニも引る景行天皇十二年御紀ニ將蹶茲石
如柏葉而拳焉因蹶之云こ故号其石曰蹈石也あどの
蹶ハ必久恵又ハ切めて祁と訓べき所あり名義抄ニ
蹈を久恵流と訓るを以合考るニ久恵久宇と和行ニ

ハ活くうずして久恵利久恵流久恵礼祁理祁流祁礼と良行の四
段活るゑニ轉して用く言なりけり然るニ皇極天皇
三年御紀ニ打毬之侶と有る打毬を久由麻理と訓て
又傍ニ久恵理とも訓たる何れも片假名なれバ恵と
由と似たるより混ひたるもの所思しきを和名抄ニ
蹴鞠以足逆蹈也世間云未利古由と見え其より以前ニ出来
れる名義抄ニも蹴ニ布年久祁流と有ハ本なりて
久由とも古由とも有ハ其頃已ニ久恵を夜行ニ活く
すゑ事も有しなり然れども其ハ雅言なるゆゑ故ニ
和名抄ニも世間云と云るニて當時の俗語なれバ

右の打掬も正しくい麻理久恵と訓むべかりける
記傳（わも巻）も此事に心着めて其辨有れども言足らざれ
ば今右の如く説を成せるあり同書に云く字音の祁
をも久恵と云る事多し法華経を保久恵経（養）と云る久
恵年叙久源氏を具恵年自て云る類あり」と云れなり
又名義抄に蹙に阿志登毘比久又加美登毘比久と云
訓有り足と手と引き髪と手とを曳て人を倒す事と
聞えなり散い記傳七四十に字鏡に怒波良介志又知流と
見え書紀貢に厥土壌の壌を波良と祁理と訓を万葉
廿二十五丁に安麻守夫祢波良と尓宇伎氏あど此等物い
別あれと言の意い同じく仇て波良波良又本呂本呂
ど云言も皆同言なる可し（略要）と云れたる実に然る言
なり此に就て思ふに李花の散れる事を万葉十九九丁に
庭尓落波太礼能未遺有可毛と有る波太礼い散（うたレ）蚕
の義なる可し三十七に落乱雪驪（ハラメ）と有る驪い班（ハラ）の義
なるが十五十九丁に庭毛薄太良尓三雪落有と有を庭裳
保杼呂尓雪曽零而有と見えて波太良と保杼呂と同
言なり此波良太を俗に波良利と降ると云るれども
波太良も保杼呂も波良と本呂ことすり出て此の散
を敷麗に箇須と注されたる意に合へる者あり万葉十九
に天雪乎冨呂尓布美安多之鳴神毛と有る冨呂も右
の波良と同言なるが物の綻ろびたるを俗に煩呂と
云も散の意なり猶此波良も原野の波良も同じくし
て廣と云も右に等しき由なれど傳四巻高天原の下に
註せり○雄誥を此云烏多稽眉と注されたり古事記に

も伊都之男建蹈建而と有て訓建云多祁夫と有り口訣ハ雄誥男叫也と說たれども多稽眉ハ健夫流と用くれても無く一種別れて猛呼の切れる言ハも有む叫ハ万葉九ハ常世邊棚引去者立走叫袖振ゐど有が如く遠放る物を呼ぶ事ハて放呼の義なれば此の誥あるとハあるとハ異なり然れば石の古事記あるも上ある男建ハ雄猛呼の義ハて其ハ祝詞ハ荒備給比健備給比祟給事無志と有る健び（同書ハ異）ある者ハり思混ふ可うゝず通證ハ古語云物部之矢多分心蓋菊池武重主の物部の夜多祁心の一途ハ思ひ切と彼神ハ知ず也と詠れたる弥健き心と云事ハて此の雄

（所比ハ在て雄しく猛るる御色を厲す給ふ意なる）

（先長髓彦と戰給へるハ利有ざりしかば引軍退屯亦不敢逼却座草香津孤角而為雄誥焉と有ハ厲ハ向ひて此方の兵威の示しなる御言を慨と宣給ひて厲を待せ給へるなり此ハ雄誥を鳥多鷄厲と訓るハ其打呼ひ給ふなりハ兵卒の勇こ健ぶ事一の甚しうなり次ハハ

誥ハも非ず又矢叫の例ハも非る有り其引る矢木集ハ道遠き那須の御狩の矢叫びハ逃ハ鹿の毒ハ聞ゆる矢を以て放呼ぶ義なり下ハ逃れぬと云も其逃るる様て道無しと云事を哀なる物ハして詠るを考ふ可し神武天皇御紀ハ五瀬命の乃撫劒而雄誥之曰慨哉大丈夫被傷於虜手將不報而死耶と有る慨哉以下ハ雄誥の御詞ハして甚く慨せ給ふ御志を雄こしく健く宣給へりしなり次ハ引く万葉歌ハ牙喫建怒而と有る牙喫ハ俗ハ類齧と云事ハて強く怒る時ハ在る事なるを辨ふ可し又景行天皇御紀ハ日本武尊雄誥之曰熊襲既平未經幾年今更東夷叛之何日遠于大平矣臣虽勞之頭平其乱と有も其大命を持てし御在

坐むい如何ぞ静謐なざる事の有べきと甚く慷慨給へるゐて此御詞即雄詰なり又此東征の御間(相模海)に是ゐ海耳可二立跳渡一と宣給ひ(こして渡)膳吹山ゐてハ既得殺主神其使者豊足求字と宣給ひて蛇を跨給へるなど一とゐ雄詰之日とい書されざりつれども皆右ゐ同ト万葉九(三十六)ゐ跳地牙咬建怒而如已男尓負而者不有跡と有も其負てハ非じと慷慨と云が(即)雄詰の例なるなり然れば此の稜威之雄詰も下章第三一書ゐ吾至婦女何當避乎乃躬裝武備と有る御言の如く甚く慷慨に宣給へるが即雄詰ゐて有なり古事記ゐハ男建

今雄畧天皇九年御紀ゐ津守吉聞之踏叱曰主既ニ踏伺用猶全因後赴歌同時殞命ニ云事も有り其十八年ゐ於是物部目連目勢大刀復蒐聞物部大斤ヲ執稲ニ於軍中復進云も見ゆ

踏建而待問曰何故上来と見えたれば何故上来の御言ゐ(其)當るが如くなれども上ゐ挙たる例にて其威を示して健り云詞なりてハ其ゐ叶ハざる者なりと近昔よりも軍の時ゐ(歌を見て)勝負ゐ取懸るむと為る以前ゐ先本系を名乗り次ゐ我姓名を名乗るゐ其威を示して音ゐも聞つるむ日本一の剛の者云なるなど云て我(我と思ハむ者ハ出合へ)が勇武を示し呼ハる類ハ皆此稜威之雄詰の名残なる者なり然るを(因て)部兼俱など戦陣発時(起于)此恵伊恵伊阿布ニ(邑)也と云て其責邑(トキコエ)を此雄詰の事と為るハ邑謂れ無き事なり出雲風土記ゐ所以(以)號意字者云と今者国引詔詔而意恵登詔故云ニ意字と有る意恵ハ右の時邑と同ト物なりと蛋も

其を指て雄詰と云事なれども云ひ難きを如何ともう為む ○奮ハ布流波斯氐と訓り振威あるの振と同しく稜威之雄詰を決めて強く甚しく物為させ給へるを布流布てい云あり 此奮字を字書ハ塵也迅也飛也動也振也舒也揚也発奮也と有り名義抄ハ唯布流布てのみ有て其他の訓無し又奮を鳥張羽也と有て其訓も見えず 備古事記ハ此語ハ當る所を蹈建而と有り上より云下せる狀を考るハ庭を蹈要き沫雪の如く蹶上げ散し給ひて猶強く足蹈し給ひて男建の御言を出し給へるあり 天孫降臨章第五一書ハ其文明時蹈誥 出児云と次火盛時蹈誥出児云と次火炎襲時蹈誥出児云と次避火熱時蹈出児亦言吾是

△発と有を以見るハ大音を発て呵り嗔ハせ給ふ由と聞ゆ

天神之子云て有て此ハ妍哉吾皇子者聞喜而生之歟と嘲給へるハ故ハ蹈誥ひ出て御自強く慷慨て御言挙為させ給へる所あり 又雄略天皇九年御紀ハ津麻呂聞之蹈叱曰主既已陷何以獨全と有あどの狀も皆上ある雄詰ハ相も異らさりける者あり 万葉十一ハ大夫乃思多鷄備豆と有い本歌ハ健男之念乱而隠在云と云を云換たるろれば此ハ多祁備ハ例ハい非す唯健く隠す ○嘖讓 公下ハ此云挙廬毘と注されたり 神武天皇御紀ハ天皇即遣道臣命案其逆狀時道臣命審知有賊害之心而大怒詰嘖之曰虜尓所造屋尓自居之因案叡奮尓逼令催入と有る詰を多祁毘嘖を挙廬

〇應神天皇三十三年御紀に是歲百濟辰斯王失禮於貴国天皇王子時讓其無礼狀を有る嘖讓を許呂斯志年と訓り次み

毘と訓り其に此の舊稜威之雄詰を稜威之讓と有る
二を合せる者あるう其趣を以て亦此の御有狀を
思ふ便宜とい成るうう〜又雄略天皇十三年御紀に
齒田根命竊に采女を奸せりければ天皇聞以齒田根
命收付於物部目大連而使貢讓又木工猪名部眞根が
誤有る所に天皇因嘖讓曰何處奴不畏朕用不負心妄
輙答仍付物部ある有る此二の嘖讓を世系氏と有る
事るわども此に此ニ拳廬咄と有うう〜に同し字に言
を換べきに非るあり清寧天皇御紀に天皇即遣使嘖
讓於上道臣等而奪其所領山部と有も亦上の例あり

顯宗天皇御紀に兄弟相讓久而不起に猶嘖之曰何爲
太遲起儛之と有に起つ事の遲に依て嘖讓べりしあり
故下に天皇誥之曰石上振之神楫伐本截末於市邊宮
治天下天萬国萬押磐尊御裏僕是也と有に先に軽蔑
しめ嘖讓べりしるに慷慨して宣ふ所ある故に詰びて
然宣ひ顯いし給へりし御事あり此の嘖之を世末氏
尋常の時こうに有め始に其御兄弟二柱を天神御子
と有て且ても知奉らざりし程の事わし有ければ人と
い次第の更行くを心に怒りて国司の勢力に仕せて嘖讓奉
時の更行くを心に怒りて国司の勢力に仕せて嘖讓奉
りしらば黄二柱の御上にても然侮づるべしく為
給へるを懷らせ給ひて雄詰び坐るあり此に嘖と
詰といい別人共の事あれども又此の嘖讓万葉十一
又雄詰に意に次うも異あるべざる者あり

丁ハ誰此乃吾屋戸来喚足子根毋尓所嘖物思吾子と
有る所嘖を伊波佐礼と訓る其も今俗ハ用ふる言ハ
ハ有れども猶十四ニナ九丁ハ字佐子佐乎祢奈敝古由恵
尓波伴尓許呂波要と有と同ト義ハて母より寤めら
るゝを云ゆめば許呂婆要と本より訓べき所あるか
り偖此ハ起らも伏せも爲て其罪を糾彈ー責問ふが言本
ハて其ら轉めてハ人を責呵ハ事をも然云ふ事て
ハ成れりー者あり然れば拳廬ハ轉倒ある可し万葉十三ハ
丁ハ菅根之根毛一伏三向凝呂尓と有て一伏三向を
拳廬ハ當て書るゝど此彼思合するハ大聲ハ呼ハ

り責て人の所云を合立さるハ依て嘖讓の言ハ起れ
るゝも有むゝ口訣ハ然れば言ハ轉呼ある可し嘖喧也讓責也剛音也と云ひ簒
疏ハ嘖大呼也又爭言貌謂責讓其罪狀也と宣へる御
説ハて明らけき者あり白井宗因も罪を鞫すを許呂
て上来り給ふ御心を責問給ふを云ゆ夫と云も責問の義なり是ハ
後漢書作責讓廣ハ韻嘖音賣大呼也小尓雅詰責以辭謂
之讓と有り名義抄ハ嘖を世牟又阿夜麻流又佐伎那
年と訓り其佐伎那年ハ今も嘖又呵字を佐伊那年と
云て先惱の義なる可し偖右の万葉なる所嘖ハ當
て伊波佐礼て訓るハ俗ハ辛き目ハ逢ふ事を伊波佐
留と云是なり又讓ハ由豆流とも世年とも有り○発ハ雄詰ハ奮と云ハ就て
嘖讓ハ発と對へ云ひ又其言を並べて奮発と字を示
せて此の御稜威ハ奮ひ発れりし御事ハ極めて甚し

△天地初発と云ハ天地初立と云ふ同じく同記の

うめつる事を明らめたる者あり此即予が常ふ對語を見る法則あり若て此発を於許斯氏と訓る然る言ふて此ハ発音又発言の発と同じ言ふて多都流と云ふも異なるず偖右ふ云如く噴讓ハ大壱を挙給ふ事あるが故ふ此ふ発とハ云るふて立と云ふも異なる事無し於久て多都と通ふ例ハ古事記ふ久美度迩興而を宝氣出現章第一ノ一書ふハ為起と云ひ此の振起ハ猪を古事記ふハ弓腹振立と云るあど常ふも多き事あり又発字を也多都ふ用ひたる例万葉七三十六下ふ発渡雲西裳在哉十一九下ふ春楊葛山発雲立座妹念あど彼此有も共ふ

△者あるべし此ふて御直ふ御言を係させ給へるを申せる

相通ふ語あれバあり偖雄詰と噴讓と ハ大化同じ狀ある事を相重云る如くあれども雄詰ハ慷慨の御心を奮ひ挙させ給へるふて其ハ我が事を宣ふあり噴讓ハ御怒の御言を壱高ふ立給へるふて此の他ふ係れる事を宣ふあり次ふ径詰問爲と有ふ係て考ふ可し然るを彼神武天皇御紀ふ大怒詰噴之日あどの如きハ此二を兼て共ふ為させ給ふ時の事あり克て考合せ暁りてよ

○径ハ傳二十二年ふ云り手立ふて其手を置す直ふ立る義を以て詔を成せるふあり古事記ふ伊都之男建踊建而待問何故上来と有が如く踊建を為給ひあど〜其神の参来を傳十六十三親の下見合事高直ふ御気しを待着て物為させ給ふど故ふ径とハ云る者あり

○詰問爲ハ那自理問給比伎と訓り第二ノ書ハ天照太神疑第有悪心起兵詰問と見え古事記ハ待問何故上来と有も共ハ詰問ハせ給ふあり備詰ハ汝退の義ハて其退ハ僻易を多自呂久と訓て立退の意ある を自呂久と云も此ハ同じ備事を疑ハしき問糺すハ先ハり様ハハ陳謝するを其ハても然ハ非じ此ハて も然ハ非じて其実を得ざる限りて其云ふ所を退けて容ざるを云あり今も江戸邊の詰ハ他の云ふ事を可ず我が言を立て怒るを自礼流と云るハ退有の義と聞ゆるあり共ハ古言の傳ハり遺れる者あり此を

以て其義を明らむ可し備此の詰字を本共ハ詰ハ作れるハ誤あり纂疏の御本ハ従ひて今詰ハ改む然るハ詰ハ古到反ハて右の雄詰又ハ嘖詰の詰字あり詰ハ去質反ハて名義抄ハ那自流又伊佐年又世年又登賀又加古都又登布又都貝とも訓る字あるが上ハ通證ハ前王嘉傳史詰問嘉史記注詰責讓也とも有る如くあるハが実ハ詰ハ可き所あり備此の御有狀ハしも直ハ御問答の御在し坐し御事ハ文の上ハ著き事あるハば今云ふ限ハ非ずと雖も此ハ素戔嗚尊唯一柱のミハて天上ハ参上らせ給ふハハ非る可し右ハ引る起兵詰問と有ハても天照国の日宮ハ仕奉る神と云ハ悉ハ仕奉るハし狀ある事も知らるを其文ハ先ハ素戔嗚尊將昇天

時有一神号羽明玉此神出迎而進以瑞八坂瓊之曲玉
と有り又下章第三一書にも迺復扇天扇国上詣于天
時天鈿女見之而告言於日神也と有あど何れも天照大神に
仕奉る神等の名あり又此に至聞来詣之状と有も其
神の上坐る事を告る神の有て奏せるを聞食し及ば
せ給ふ御事あり然に無ても素より高天原に天照大
神に従奉りて八百万千万神の神留坐す所に有け
れば其起兵と云い然る神等をも従へての御事ある
に申すも更あり此に素戔嗚尊に詔も根国に罷坐む
事を請さむ為に参上り坐るに始より歌あひ奉り

せ給ふ御心あどに露も御在し坐ざりければ然る御
伴神あどを数多に従へて参上らせ給ふ可くも非る
が如しと雖も假令や然る御心に御在し坐ざらむと
しも伊弉諾伊弉冊二大神の貴御子神に坐せば御伴
神あど形の如く何どうに従へ給はざらむ其上
日神の御方にても起兵と云ふに必其神の御伴立か
どを見給ずに然為給ふまじき理あるを思ふ可し若て
宝叡出現章第四一書に素戔嗚尊即其子五ナ猛神降
到於新羅国と有り又第五一書に素戔嗚尊子号曰五
十猛命妹大屋津姫命次抓津姫命凡三神と有て天よ
り降逐いわて降坐し時に斯る御子神等有り但此に長
寛勘文に依て天上にて神皇産霊尊の御女大夜女命
に御娶坐て生坐る神と聞ゆれば此に此の昇天の時

の従給へる御伴神の例の如い立ざる者あり若て素戔嗚尊ハ實の清明き御心の坐うし日太神を崇敬ひ奉うせ給ひて參上うせ給ふ御事わてハ有しうども神性の雄健く御在し坐しが故の山川悉動き国土皆震りけるが故あて疑れて奉給ふのハ有べうしうず一のハ御父母二神の事依て賜へりし国を所知さず二のハ御母神の根国の入坐し後の御父神も絶妻之誓を建給へる国あるを慕行うせ給いむと請給へる三のハ御父大神より根国の罷れと神逐ひ給へれば就坐べきの却て上天の昇来至るのとるゝ〳〵す其の就てハ天地を震動し給へ

るあど一連び荒振る神の狀の長く異うざるが如くありければ若くハ我天原を奪ハむの御心わやと思わし疑給へるが故の今如此詰り問賀し給へる者ありり此故の其事共を一とのの推給わの就てハ其消息を左右の陳させ給ひけめども此言を反して其ハ如何此ハ如何と詰り給へりし御事是ありの然るの口訣の径詰問者責問也因此軍三度揚責色素尊鳴動而昇天故曰神疑而責問也と云あど字書の詰責罪也と有のの泥めるの者わして詰の正義を知ざる麁き説共あり又素戔嗚尊の御方の取ても得会ぬ下き御道理あむ御在し坐ける一のハ御父母二神より此天下を事依され奉給ふとハ虽も何不生

天下之主者歟々宣給へる驗ゐ因て日神と共ゐ生出
させ給へれば主張て已尊の御国とも所思し坐さる
あり二ゐハ日神ハ御父神ゐ屬奉らせ給へれば已尊
ハ母国として根国ゐ従奉らむと所思し坐るあり三
ゐハ根国ゐ入給ふゐ就ていハ辞(こまりまうし)ゐころ参上り給へれ
覲え奉らでハ如何でか罷る可きと此三事の有ゐ依
て参上ぶせ給へるゐて天照太神の疑給ふ御事ハ素
戔嗚尊ゐも理と所思し食す程の事あるが故ゐ交ゐ
相定め難させ給ひけらし此ゐ因て終ゐハ御誓の事
ゐ至る可き運びとハ成ゐける者ありて(ル)疑と云事
も事の決り難きゐ在る事あり若黒とか白とか其事
の判然ゐ見え知るとハ上ゐハ疑と云事ハ無き筈の事
あり此ゐ因てハ又其疑ふるて方ゐても其疑ふ心の
當れりとも否らずとも又定め難き故ゐ終ゐ事の起
る可き種ハひてハ成 其ハ此末ゐ至りて其清き明き
行く勢ある者あり
御心を明らめ奉らせ給ふ可き御為とのことあらバ素
戔嗚尊一柱ころ御誓をも何事をも物為させ給ふ可
き事ありけれ然るを天照太神の一速く御誓の御事
ゐ及バせ給へるハ何ある御為あるぞや其ハ素戔嗚
尊の御所為ゐ於てハ大御心ゐ所思し着し分させ給
ひ難き御事共の多きゐ就て其可さ否しさを所知し
着し分させ給ハむとてぞ先御誓ハ成させ御在し

宮内省圖書寮文庫

坐けゝ〻次ハ素戔嗚尊の御誓と成りてハ先ハ吾所
生若是男者則可以爲有清心と申させ給へる如く的
して男御子を得させ給へるが故ハ正哉吾勝と誓勝
せ御在し坐しが故ハ初より日神の凝給へりし大御
心を開け奉らせ給ふハ至りける者ゆり素ハ素戔
嗚尊を疑給ひあゞらハ却りて日神の先ハ御誓の御
事ハ及ハせ給へる御事ハ就て古より以来此重倒ハ
至るまで一人そして其所由を明らの云人無きを以
て見る時ハ又一人なハ天統の因て起る基本を伺奉
れる人無しと見えたり豈未此を能爲りて云めやも

国立公文書館
National Archives of Japan